知見の囲炉裏端

君は『ゴルゴ１３』を知っているか！

技術経営士の会　島田 博文

いつの日からかは忘れたが、私は“さいとうたかお”の漫画『ゴルゴ１３』の愛読者になった。１巻から最新刊（現在は199巻）まで全て揃えようとしたり、入院した友人のお見舞いに持って行ったこともある。ゴルゴ１３の連載50周年記念特別展にも行った。

現役時代、私はその時感じたこと、伝えたいことを短い文章にまとめ＜島田 Weekly＞として会社のイントラネットに毎週欠かさず投稿していた。一度「私の愛読書は『ゴルゴ１３』」と投稿したことがあった。すると社員から賛否両論のメールが届いた。「私もファンです！」という賛成派と「社長ともあろう者が！」という否定派が半々ぐらいだった。

私が『ゴルゴ１３』を好きになった理由は三つある。
まず狙撃手である主人公のコードネーム「ゴルゴ１３」ことデューク東郷がミステリアスな存在だということ。
出自、生年、国籍不明の男で、色々な流儀を持っている。
「握手はしない」「背後に人を置かない」「依頼人とは必ず会う。しかし二度とは会わない」。
新聞での依頼方法もユニークだ。
そして彼は、「世の中の事象はすべて虚しいもの、大事にする価値がない」という思想信条の持ち主だ。そのため世間でいう＜正義＞からも＜悪＞からも仕事の依頼がくる。依頼主の魂胆や思想には関係なく、依頼理由に嘘がなく、それ相当の金額を支払いさえすればどんな仕事でも引き受ける。この辺の設定になんともアウトロー的魅力がある。

第二は、幅広い脚本の協力者がいて、２０世紀に起きたグローバルな事件を扱っていることだ。世界の近代史・時事・国際ビジネス・地理等の実態が勉強になる。
主人公が狙撃手なので扱っているテーマは闇社会の話が多い。それに詳細なデータの裏付けがあり、どこまでが真実でどこからがフィクションなのかが判然としない。歴史と神話の境目がわからないことと似ており、読者の想像力をくすぐる面白味がある。
私たちは、闇の世界の話を知る機会は少ない。知り得る情報は氷山の一角で、物事は水面下で進行しておりそのバックグランドは知りえない。これを知ることは物事の本質を理解するうえで大事になる。

STAMP の元副会長の栢原さんもゴルゴ１３のモデルになった。

日本土木学会の会長在任中の講演「それは誰が成しえたのか！」がきっかけだった。彼は、「サグラダファミリア教会はガウディが、日銀や東京駅は辰野金吾が、東京都庁は丹下健三が造ったということは多くの人が知っている。しかし、黒四ダム・明石海峡大橋・青函トンネルとなると、構造物は知っているが、そこに人の名前が結びつかない。これが今の土木学会の問題点の一つだ」と指摘した。その主旨は「ヒーローの居ないところには優秀な人材が集まらない。」ということだ。
彼は「取材を受けたのは一度だけで、一部事実もあるが、あとは全くの関係ない話になっている」と言っていた。読者にはどこまでが事実でどこからがフィクションかは全く分からない。

三つめは、不可能と思える狙撃をやってのけるアイデアが面白い。それが精緻なデータを基にして理にかなった方法なのだから目から鱗だ。一度、不可能に挑戦するアイデアをまとめてみようと思った事もある。

麻生副総裁は『ゴルゴ１３』を全巻揃え、専用の本箱を持っているそうだ。なんとも羨ましい話だ。私は段ボール３箱になり引っ越しの時に処分した。それ以後は出張の時に駅で買って読む程度になった。最近はコロナ禍で時間ができ、図書館で借りて読むことを思い立った。初期の頃のストーリーでも新鮮に感じるのが嬉しい。

例えば、コロナ騒ぎの発端になった、クルーズ船・ダイヤモンドプリンセス号の話は、２０年前に扱われている。また臓器移植ビジネスの話など全く知らない話もある。日本のロボット「アイボ」を、人が入れる大きさにして戦車の代わりをさせる近未来の話もある。

今はゴルゴ１３の詳細なバックグランドのデータをまとめている。これもチリも積もれば山となるように、相当なデーターベースになり世の中を俯瞰的に見るのに役立つ。こうした現代の事件簿と歴史、特に宗教の歴史と民族の歴史を知れば現代世界で起きている多くの事象の本質が理解できるようになると私は思っている。
是非皆さんも、まずは図書館で借りて（笑）読んでみてください。同好の士がいたら集まりたいですね。

（注：さいとうたかお氏は2021年９月に84歳で死去。1964年から連載を始め2021年7月201巻600話超で最も累計発行部数が多いことでギネスに登録。手塚治虫文化賞特別賞受賞・紫綬褒賞受章・旭日小受章受章。今も後継者で「ゴルゴ１３」は連載を続いている。）